The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	祈りからみる共生社会
Author(s)	大塲, 麻代
Citation	未来共生学. 2015, 2, p. 343-347
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51798
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

る（児玉 2011）。

3　肥後（2000）は、障害児教育の見地から、「すごす」かかわりから「めざす」かかわりへの移行を主張した。「めざす」かかわりとは、できないをできるに変えることに主眼を置いたかかわり方であり、「すごす」かかわりとは、できないからできるに至るまでに経験するさまざまなムダやアソビを大切にし、一緒に○○することに主眼を置いたかかわり方である。本論では肥後（2000）の議論の範囲を二者関係から社会へと広げているが、言いたいことはそう変わらない。

参考文献

浦河べてるの家
2002『べてるの家の「非」援助論―そのままでいいと思えるための25章』東京：医学書院。

児玉真美
2011『アシュリー事件　メディカル・コントロールと新・優生思想の時代』東京：生活書院。

高橋源一郎・辻信一
2014『弱さの思想　たそがれを抱きしめる』東京：大月書店。

立岩真也
2013『私的所有論第2版』東京：生活書院。

肥後功一
2000「コミュニケーション障害を生み出す見方」大石益男編『改訂版コミュニティ障害の心理』pp.19-38、東京：同成社。

鷲田清一
2006『「待つ」ということ』東京：角川学芸出版。

エッセイ

祈りからみる共生社会

大塙 麻代
大阪大学未来戦略機構第五部門特任助教

私がケニアとかかわりを持つようになったきっかけは、青年海外協力隊で理数科教師として地方の中等学校（日本の中学校3年生から高校3年生の年齢に相当）に派遣された時からである。以来、ケニアと日本を行き来し、今は年1～2回の頻度で訪問している。

そのケニアは多民族国家で、人口のおよそ8割がキリスト教徒、1割がイスラーム教徒、そしてその他ヒンズー教徒などからなる。宗教は主に諸外国の人びとによりもたらされてきた。中でもキリスト教は、宣教師が東アフリカで布教を始めた19世紀末頃から主な広がりをみせている。ちょうどその頃、アフリカ大陸は次々と西欧諸国による植民地支配下におかれていくのだが、ケニアは、ケニア西部に位置するビクトリア湖（白ナイル川の源流）の資源と領土をめぐる西欧の争いに巻き込まれるかたちで、イギリスの植民地下に敷かれていく。イギリスはビクトリア湖を自国の領土にするため、アクセスのルートを確保する手段としてケニアを保護領とし、ケニア東部の海岸に位置するモンバサからケニアを横断し隣国ウガンダに至るまでウガンダ鉄道を敷設していった。これにあたり、大勢の現地労働者が雇用されたのであるが、イギリス人との間で言葉によるコミュニケーションの問題が生じたとされる。そこで、植民地政府は宣教師の布教活動を許可する一方、教会を学校として英語教育にも力を入れていった。かくしてキリスト教信者が増加していったのである

が、その宗派は現在数え切れないほど存在している。

一方イスラーム教はと言えば、中東地域から交易や宗教の迫害で逃れて来た人びとがそのまま住み着き、一部は内陸に移住していった。たとえば、20世紀初頭には既に首都ナイロビにイスラーム教徒のモスクが建設されている。残りの多くは東部沿岸地域に居住するようになり、そこでイスラーム教の布教が行われていったのである。特に20世紀に入ってからは、既にキリスト教が内陸部で広まっていたこともあり、イスラーム教の布教活動は主に沿岸地域とソマリア人が多く居住している北東部一帯に集中していた。人びとが移動・移住を繰り返す中で、ケニアには異なる宗教を持つ人びとが共生する礎が築かれていったと言える。

私がケニアで生活をしていてふと「共生」を感じる瞬間に、時と空間を共有する「祈り」の場があげられる。私は日常生活において祈ることはあまりしない方である。仮にする場合でも、大抵は一人でする。けれども、ケニアに行きケニア人と一緒にいると、共に祈る機会が断然増える。ケニアの人たちは食事の前に必ずお祈りを捧げる。だから私も一緒に食事をする時は共にお祈りを捧げる。それだけでなく、学校の朝礼（全校集会）や行事の始終、会議や集会でもその始終でお祈りを捧げる。

私が赴任していた中等学校の場合、コーラスグループがあって、彼らがお祈りを執り行っていた。たとえば朝礼の時は、彼らが前へ出てきてまず聖書のある一節を読む。その後讃美歌を謳い、最後に一人が「共にお祈りを捧げましょう（Let's pray）」と言って全員でお祈りをする。私の学校は、首都から南東方向に車で3～4時間程の地方農村地域にあったこともあり、生徒・教職員の全員がキリスト教徒であった。

キリスト教徒とイスラーム教徒が一緒にいる会議の場では、お祈りのスタイルはその場の代表者に依る。たとえば20人程度の会議において、議長が指名した人がイスラーム教徒であれば、その方がイスラーム教のお祈りをアラビア語でする。そのお祈りの時は、その場にいる全員が「祈り」の時と空間を共有するのであり、宗教それ自体が問題になることはない。仮に指名された人がキリスト教徒であれば、キリスト教のお祈りになる。

共同研究をしていると、私にこの番が回ってくることがある。4人程の小さな会議でも、全員が集まると議長が「今日はAsayoにお祈りを頼みたいと思います」と言う。いつも誰かが「Let's pray. We thank you, the Lord, for…」と数分程度英語でお祈りするのを聞いているため、このような時のお祈りの仕方は分かっている。たとえば会議で集まっている場合、みんなが無事に集合できたことに感謝し、会議が無事終了するようお祈りする。大体の内容は活動に関わることであるが、あくまでもお祈りを唱える個人にその内容は委ねられる。私の場合、内容は言えなくもないが、それを現地の人たちの前でしかも英語で唱えることに戸惑いを感じる。さすがに静寂した場で神に対して英語でお祈り、となると日常的に行っている現地人のように言葉がすらすら出てこない。だから私が唱える時は日本語にしている。日本語で「今日全員がここに集うことができたことに感謝します……」という具合に唱える。不思議なことに、案外すらすら言葉が出てくるものである。そして最後にお祈りを終えたことが相手に伝わるよう「アーメン」と言う。そうするとその場の全員が「アーメン」と言い、議長が「では本日の議題に入ります」と会議を始める。

広範囲の不特定多数の人たちに対し、ケニアで私が祈りと共生について感じる瞬間に、早朝から流れるイスラーム教徒のお祈りがあげられる。首都ナイロビのホテルにいると、早朝5時頃イスラーム教徒のお祈りがスピーカーから大音量で流れてくる。首都のどこにいても聞こえるわけでもないが、比較的イスラーム教徒が多く住む地域では日常的に聞かれる。始めは慣れなくても、そのうち自然と自分の日常に入ってくる感覚は不思議である。緩やかな流れのリズムが心地よく聞こえるのかもしれない。

もう一つ、祈りと共生に関する印象的な出来事をあげるとすれば、2013年3月の大統領選挙結果公表の場があげられる。少し遡るが、

2007年12月暮れの大統領選挙では、再選を狙う現職大統領ムワイ・キバキ氏と対立候補のライラ・オディンガ氏による一騎打ちとなった。開票速報の途中まではオディンガ氏が優勢であったが、突如としてキバキ氏勝利が宣言され、そのまま深夜に大統領宣誓式を強行したことで、オディンガ氏を支持する若者を中心に騒乱が起こった。各候補者を支持するグループ間の争いはやがて民族間への暴動に発展し、「選挙後暴力」と名付けられたこの騒乱では、千数百名が犠牲者となり、数十万人の国内避難民がうまれる未曾有の大惨事へと発展した。この出来事が教訓となり、2013年3月の大統領選挙では、選挙管理員会による事前の周到な準備と調整、選挙過程の透明性と結果の説明責任が徹底された。開票結果までに5日を要する異例の長さとなりながらも、結果公表日を迎えたのである。海外メディアが詰めかける会議場では、式典が盛大に執り行われた。その冒頭、イスラーム教徒とキリスト教徒の代表者がアラビア語と英語のそれぞれでお祈りを捧げることから式典は始まった。私はこれまであまりこのような光景を見てこなかっただけに、ケニア社会が宗教や民族の違いを超え共生社会を目指す大きな決意をしているように感じられた。異なる宗教でのお祈りが捧げられたことは、この国にとって重要な意味がある。

このように、私はケニアの日常でのお祈りが好きである。共に祈る時、人びとは人種、宗教、民族の壁を取り払い、その場で唱える人の声に耳を傾ける。唱えている人の言葉が分からなくても、共に生活し活動することで何を唱えているのか想像できる。様々な祈りが反響する日常に接する度、ケニアは寛容な国だと思う。ここでは宗教による対立は目立って見られない。日々の祈りが、人びとの心に共生の根を深く生やしているように思う。

二つの世界大戦後に設立された国連機関の一つユネスコは、その憲章の前文で次のように述べている。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」戦争だけでなく、人が人を排除しようとするその行為の第一歩は、個人の心の中でうまれる。だから何よりも、一人ひとりの心の中にどのように共生の種を蒔くことができるか、そして社会がどのようにそれを支援していくことができるか、これらが重要なカギを握っているように思う。少なくとも、ケニア社会はそのことを私に教えてくれている。